



第 151 号

二〇一七年六月三日発行
発行所 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 鈴木裕明

日本の考古学はいつ始まったのか？

所長 菅谷 文 則

この素朴な疑問は、きわめて簡単のように見えるが、なかなかの難題である。

日本考古学協会では、一八七七(明治一〇)年の東京都大森貝塚の発掘調査をもって日本における考古学の始まりとして、盛大な行事などを行った。そうすると、本年は日本考古学において、一四〇年にあたることになる。

昨年の世界考古学会議京都大会では、濱田耕作(一八八一〜一九三八年、号は青陵)が、京都大学における考古学講座を開始した一九一六(大正五)年を日本考古学の開始年とされている。

さらに遡って、徳川光圀(一六二八〜一七〇一年、水戸藩第二代藩主)による栃木県上侍塚・下侍塚古墳の

学術的発掘調査を行った一六九二(元禄五)年をもって、その始まりとするという意見もある。これについては、近代考古学の理論に立つておらず、古物探求(古物趣味)とも言われることがあるが、古代の那須国とその支配形態を知るためとする調査目的を定め、検出遺物などの詳細な図面を絵師に描かせ、上梓されてはいないが、あわせて文字にした記録を作成し、さらには出土品を頑丈な木箱に周到に詰め再び地下に埋納するという手法がとられていた。

目的の立証、調査手段と結果の記録などは、今日の考古学の研究手法と共通するところが少なくない。その後の大名による古物研究に影響を及ぼしたことは想像するに難くない。

一九三八(昭和一三)年九月一三

目 次

日本の考古学はいつ始まったのか？
 広陵町黒石一〇号墓出土の土器
 荒池瓦窯産の瓦を特定するための新資料紹介
 橿原考古学研究所研修記(上)
 人の動き・海外交流
 附属博物館展示案内

菅谷文則	1
関川尚功	2
岡田雅彦	3
馬田雅玲	5
編集部	8
附属博物館	8

日に設立されたわれわれの橿原考古学研究所は、幾度の変遷はあったが、明年に八〇周年を迎える。その六月一六日には、八〇周年式典などを予定している(設立記念日の九月一三日前後では、式典の日がとれず六月とした)。

もともと橿原神宮の神域拡張工事の過程で多くの出土品があり、その発掘調査事務所として橿原考古学研究所は設立された。一九四〇(昭和一五)年には橿原道場(県立橿原公苑の前身)が建設され、神域を森林とし、運動施設を併設し、日本文化を知るための大和国史館、橿原文庫などが整備された。橿原考古学研究所も発掘調査に対応する臨時の組織から、常設の研究所となっていた。

その後、一九四五(昭和二〇)年の敗戦をへて、昭和三〇年代までは、なかなか文化施設の再組織化・整備には手が回らなかつた。橿原神宮周辺でも運動施設の整備が先行した。その後、橿原考古学研究所附属博物

館開館があり、橿原文庫は県立橿原図書館を経て図書情報館へ移設され、研究所は平成になってから新庁舎建設が行われた。

畝傍山東麓の一九四〇年に始まる豊かな森林、運動施設、考古学研究所が三位一体となって、歴史を知り、歴史を楽しむフィールドを形成している。我々も研究所及び博物館の研究水準向上とその成果の県民への還元をはかつていく努力が必要である。研究所八〇周年は、これまでの歴史の顕彰だけではなく、さらに飛躍をはかる年である。所員及び関係者のみなさまのご尽力を賜りたい。



広陵町黒石一〇号墓出土の土器

上牧町教育委員会 関川尚功

一、はじめに

奈良盆地内の弥生時代墓制においては、これまで平地における方形周溝墓は数多く知られ、その傾向もほぼ明らかになっている。しかし、丘陵上に築かれ、古墳の立地に共通する墳丘墓は奈良盆地内部においてはきわめて少ないという実態がある。

広陵町黒石一〇号墓は馬見丘陵の東南部に所在する数少ない弥生後期の墳丘墓とされているが、この調査結果については概報の刊行にとどまり、その伴出土器の内容が明らかで

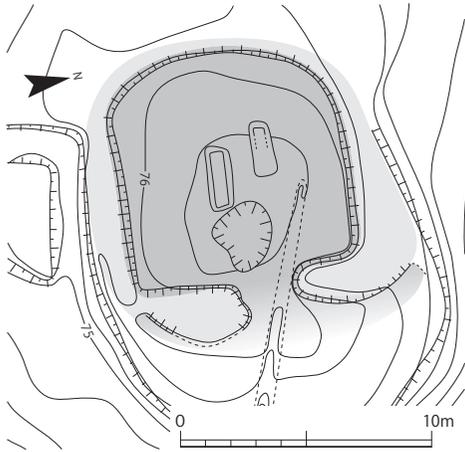


図1 墳丘測量図 (S = 1/300)

黒石一〇号墓は馬見丘陵の南東端、新山古墳群黒石支群中の一辺一〇・四mの方形墓である(図1)。周溝がめぐり東辺中央に前方部状の陸橋をもつ。埋葬施設は二基の組合式木棺であるが副葬品はみられない。支群中の数基の古墳の中において最高所に位置し、調査前には前方後円墳と認識されていたように、立地条件において古墳との違いはない。

また、ここから北西約四〇

はなかつた(樞考研一九八二)。

近年、同じ馬見丘陵の南西部で文献環状乳神獣鏡・鉄製武器類を副葬する上牧久渡三号墳において、棺内より弥生後期型甕が出土したことにより、墳丘形態及び立地条件が類似する黒石一〇号墓との比較が必要となった。このため今回、当研究所と調査担当者の了解のもとに、この土器の実測図を示し、今後の墳丘墓検討の資料としたい。

二、黒石一〇号墓の概要

〇mには馬見古墳群最古の大型古墳である、前方後方墳の新山古墳が位置する。

三、出土土器

これらの土器はすべて周溝内出土とされる。これまで附属博物館刊行の特別展図録『前方後方墳』に写真が掲載されており、今回これらを図化したものである(図2)。

1は広口壺の中でも口縁端部がやや内屈するタイプの壺である。2は通常の広口壺の口縁部、3は長頸壺の口頸部、4は壺の肩部で退化した小さな山形の取手が付く。5は底部が上げ底となる小型の鉢で、底部側面周囲に指頭圧痕が残る。6はやや大型の器台の受部と思われる。7・11は壺類の底部である。

このように、出土土器の器種は壺が主体で、鉢・器台があり、高杯・甕はみられない。

四、黒石一〇号墓の築造時期

出土土器の中では広口壺が量的に多く、長頸壺は口頸部がやや短く小型化している。また小型鉢も底部の上げ底化が進んでいる。これらの特徴より黒石一〇号墓の築造時期は弥生時代後期後半とみることができると

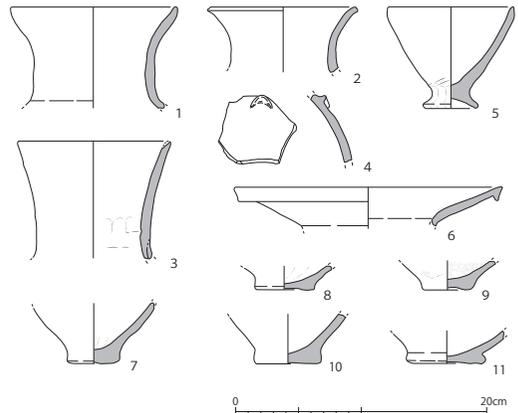


図2 周溝出土土器実測図 (S = 1/6)

大和とその周辺地域の弥生後期墳丘墓は、高地性集落の居住域に近接して立地する例がいくつか存在する。しかし黒石一〇号墓周辺においては同時期の弥生遺跡は知られていない。黒石一〇号墓は、この時期、奈良盆地において方形墳丘墓が集落より離れた丘陵上に単独的に出現する事例として重要である。

参考文献

- 奈良県立橿原考古学研究所一九八二「新山古墳群」奈良県遺跡調査概報一九八〇年度
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館二〇〇四「前方後方墳」

荒池瓦窯産の瓦を特定するための新資料紹介

岡田 雅彦

一、はじめに

荒池瓦窯は、「東大寺三堺四至図」に記載される「瓦屋」と考えられている。「東大寺三堺四至図」における荒池瓦窯が描かれている位置、荒池瓦窯周辺の工事から興福寺式軒瓦

(6301A、6671)や東大寺式軒瓦(6235Mb、6732G・j)などが採集されていること、東大寺旧境内から興福寺式軒丸瓦6301I・興福寺式軒平瓦6671J

が出土することなどから、興福寺の瓦屋から操業途中で造東大寺司の瓦屋に所属が変わったとする考えと、他の寺院の瓦を依頼受け作ることもあるが、操業期間を通して興福寺所属の瓦屋であったという考えがあり、その評価は定まっていない。

荒池瓦窯の発掘は、奈良市高畑町の個人住宅にともなう平成二三年度の発掘調査で初めてその存在が明らかになった。発掘調査では灰原が検出され、興福寺式軒丸瓦6301B・I、興福寺式軒平瓦6671B・J、丸瓦、平瓦、南都七大寺式鬼瓦I式

B1などが出土した。その調査成果については、筆者が瓦の整理・抽出を手伝い、平成二四年度に担当者により概要報告が刊行されている。

荒池瓦窯の概要報告が刊行された同じ年に、奈良教育大学から新薬師寺旧境内発掘調査報告書が刊行された。この中では、6301I・6671Jが出土したことが報告されて

おり、荒池瓦窯で生産された瓦が新薬師寺薬師金堂の創建瓦として使用されていたことが明らかになった。またこの中では、平瓦凹面に「ハ」字状痕跡の残るものが「文字瓦」として報告されている。これと同じ痕跡を持つ平瓦は、荒池瓦窯でも出土していたが、諸事情により概要報告には掲載できていなかった。

荒池瓦窯と同範の軒瓦が出土する新薬師寺で、荒池瓦窯と同じ平瓦凹面「ハ」字状痕跡が出土したということは、軒瓦と同様に荒池瓦窯産の瓦を特定する上で、この痕跡が極めて重要な要素であることを示している。

平成二八年には、岩永省三氏によって正倉院の屋根から降ろされた平瓦の詳細な分析が報告され、その技術的特徴から、正倉院の屋根に葺かれていた奈良時代の桶巻作り平瓦が、荒池瓦窯産の平瓦である可能性が高いことが指摘された。ただし正倉院の屋根には、奈良時代の軒瓦が残されていないため、新薬師寺のように平瓦凹面「ハ」字状痕跡が確認できれば、正倉院の瓦がより確実に荒池瓦窯産の瓦であると言及できたはずである。

そこで本稿では、概要報告で「ハ」字状痕跡を掲載できなかった責任を果たすため、「ハ」字状痕跡を持つ平瓦を紹介したい。そしてこの痕跡の存在によって、軒瓦がなくなると荒池瓦窯産の瓦であることを周知させることが本稿の目的である。

二、平瓦凹面「ハ」字状痕跡

荒池瓦窯では、凹面「ハ」字状痕跡を持つ平瓦は、4種確認できた。それぞれ、HA・Dに分けて紹介していく。

平瓦はいずれも成形・調整が共通する。凹面は未調整で、側板痕跡と布目痕跡が残る。凸面は、縦縄タタキが施されたのち、狭端側1/2、1/3に強いヨコナデが施される。

「ハ」字状痕跡は、凹面の広端側のみ確認される。いわゆる恭仁宮式文字瓦や平城宮式文字瓦のように押印されたものではなく、「ハ」字状痕跡を布目痕跡が切っているため、側板自体に付けられた何らかの痕跡であると考えられる。

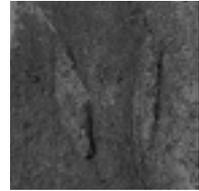
HA「ハ」が狭端側に開く形状のもの。HAの二画目は中央が太く、上下に向かって細くなる。二画目は均等な太さで、一画目に比べて細い。HB「ハ」の一画目と二画目がほぼ平行し、二画目が逆「く」字を呈するもの。一画目の上部は二股に分かれ、下部は先細りする。二画目は上部・下部ともに二股に分かれる。新薬師寺旧境内報告書図38・34と同じ可能性がある。

HC「ハ」の一画目と二画目がほぼ平行し、二画目が逆「く」字を呈するもの。一画目の上部は二股に分かれ、下部は先細りする。二画目は上部・下部ともに先細りする。「ハ」字状痕跡の下方に縦方向の木目状の痕跡が確認できる。

HD「ハ」の一画目と二画目がほぼ平行し、二画目が逆「く」字を呈するもの。一画目は二画目と比べて太く、中央に縦に長い線が確認できる。二画目は上部・下部ともに先細りし



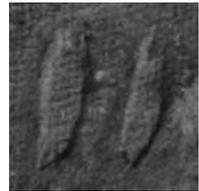
「ハA」拓本 (S=1/2)



「ハA」トレース・写真 (S=1/1)



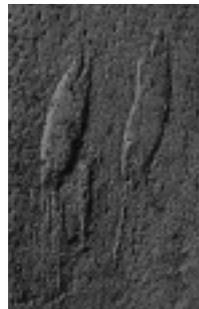
「ハB」拓本 (S=1/2)



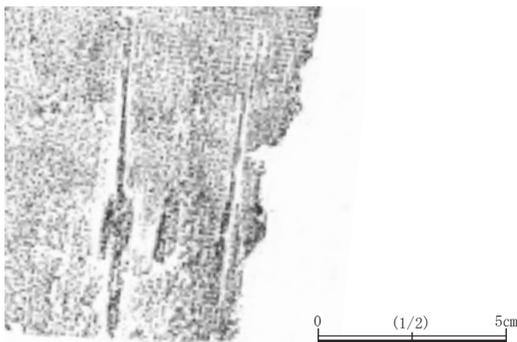
「ハB」トレース・写真 (S=1/1)



「ハC」拓本 (S=1/2)



「ハC」トレース・写真 (S=1/1)



「ハD」拓本 (S=1/2)



「ハD」トレース・写真 (S=1/1)

図1 荒池瓦窯出土「ハ」字状痕跡 (拓本: S=1/2、トレース・写真: S=1/1)

ない。新薬師寺旧境内報告書図40—39・41と同じ可能性がある。

以上のように、荒池瓦窯で出土した「ハ」字状痕跡は、4種確認することができる。

三 まとめ

本稿では、概要報告で掲載できなかった荒池瓦窯出土の凹面「ハ」字状痕跡を持つ平瓦を紹介した。この痕跡は、平瓦凹面広端側の特定の場所で確認できるため、残っていれば極めて認識しやすい痕跡といえる。また、この痕跡を見つけるができれば、軒瓦が出土しなくとも荒池瓦窯産の瓦と見分けることができる重要な痕跡でもある。

本稿における紹介で、荒池瓦窯産の瓦の特徴が広く認識され、その存在が新薬師寺以外の遺跡でも確認することができるようになれば、荒池瓦窯の所属に関する研究は、より進展していくものと考えられる。

本稿を執筆するにあたって、興福寺教中五百樹氏、奈良市教育委員会原田憲二郎氏、大阪府文化財センター奥村茂輝氏には、荒池瓦窯、興福寺式軒瓦などについて、多くのご教示いただきました。深く御礼申し上げます。

註

(1) 平松良雄「東大寺境内の6301—6671の出土傾向について」

『東大寺成立過程の研究 平成一〇年度—平成一一年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(二))研究報告書』二〇〇一、

(2) 前者については、堀池春峰「造東大寺瓦屋と興福寺瓦窯址」『日本歴史』一九七日本歴史学会一九六四、奥村茂輝「造東大寺司造瓦所と瓦屋」『MUSEUM』五九三東京国立博物館二〇〇四などがあり、後者については数中五百樹「興福寺と荒池瓦窯の瓦」『MUSEUM』五九三東京国立博物館二〇〇四などがある。

(3) 渡辺和仁「名勝奈良公園・荒池瓦窯跡」『奈良県遺跡調査概報二〇一一年度』奈良県立橿原考古学研究所二〇一二

(4) 奈良教育大学「新薬師寺旧境内—奈良教育大学構内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書—」二〇一二

(5) 岩永省三「正倉院正倉の奈良時代平瓦をめぐる諸問題」『正倉院紀要第三八号』宮内庁正倉院事務所二〇一六

(6) 図面は、狭端側が上になるように配置している。

(7) ただしハBとDは、ハの一画目と

二画目がほぼ平行しその間隔が同じであること、二画目が逆「く」字を呈すること、一画目の上部が二股に分かれ下部は先細りするところ、痕跡周辺の側板痕跡が似ていることなどが共通しており、同じ痕跡である可能性が高い。ハCの「ハ」字状痕跡の下方には、ハBにはない木目が確認できること、

橿原考古学研究所研修記(上)

寧夏文物考古研究所 馬 暁 玲

ハB二画目上部の二股部分がハCではつながるようにみえることから、ハBとハCとなる可能性が高い。ハDは、一画目に縦線が入るが、その縦線はハC下方の木目位置と同じ場所であり、木目部分が割れたと推定することが可能である。以上から、ハBとハCとハDと痕跡が変遷する蓋然性は高い。

寧夏文物考古研究所と奈良県立橿原考古学研究所が締結する友好共同交流協定書により、二〇一六年八月二二日から二〇一七年六月二二日まで、私は日本で一〇ヶ月の研修を行う機会を得ました。この間、日本の発掘調査、文化財管理・保護の現状を知ることができました。また古代墳墓壁画研究のために日本にある資料を収集し、日本語も学びました。以下は、日本での私の研修の概要と収穫・感想の報告です。

一、日常生活と日本語学習

私が日本で借りたアパートは、ピ

ンク色の三階建てで、アパートの前は常に澄みきった高取川が流れ、河辺には絶えずさまざまな野の花が咲いていました。四月には、河辺に満開の桜が満ち溢れ、私のアパートの前は花の海となっておりました。アパートの部屋は一人暮らし用で中国の部屋と比べるととても小さかったのですが、日常生活の用具はそろっており、近くにはコンビニがあつて、生活するにはとても便利でした。

私のアパートから橿原考古学研究所まで通うのに、有名な橿原神宮の敷地のなかを通っております。研

究所から借りた自転車がありました。私は歩いて行くのが好きでした。神宮のなかにある小さい水田、深田池に遊ぶ水鳥と亀、歴史的建造物等、私は毎日これらの情景に引きつけられ、歩みを止めました。まるで浄土のような静けさを感じました。私の研修室は研究所の本館の北東に位置しており、窓の外には樹木で覆われた有名な大和三山の一つ、畝傍山を望むことができました。

日本語学習は主に、橿原市今井町にある国際交流センターで行いました。学生達は大部分が東南アジア諸国から来ており、ほかにアメリカ人



写真1 高取川河辺の桜(筆者撮影)

やアフリカ人がおりました。先生はすべてボランティアで、熱心かつ根気強く教えていただきました。教材を使った授業以外では、先生方は各学生の出身国の風土と習慣にとっても興味をもっており、それに関する会話をしました。私はあまり多くの日本語を話せないで、漢字と片言の英語で、たどたどしくも楽しく意志の疎通をはかっておりました。ほかに、毎週火曜日夜と時々昼間の時間を使って、研究所の若い所員と一緒に、日本語と中国語の相互学習を行いました。

中国と同様に、日本にも多くの伝統的な祝日や慣習があつて、私に日本の文化を体験させるため、研究所が差配して、一年に一度の月見会・忘年会・新年会等へ参加させていただきました。新年には、私は橿原神宮へ初詣に行き、菅谷所長の家では皆と一緒に日本式の新年のあいさつととても美しくおいしいごちそうを経験しました。また、奈良公園では若草山の山焼きを見ました。春の訪れの頃には、東大寺二月堂で伝統的な行事である修二会(お水取り)も見ました。桜の満開の時期には、とてもきれいな和服を着て花見をしました。

これらはすべて私にとって忘れ難い貴重な日本文化の体験で、日本の伝統文化が、現在の日本人の生活のなかに引き継がれていることを感じさせてくれました。

二、日本考古学・歴史学の学習

① 発掘調査

日本考古学の発掘調査の方法を理解することは、私の今回の研修目的の一つでした。二〇一六年一〇月から、私は研究所が行っている御所市中西遺跡第二六次調査に参加しました。調査区の範囲は比較的大きく、弥生時代前期の水田遺構が検出されていきました。私はこの発掘現場で以下のことに注目しました。発掘現場

参加初日ですが、発掘作業員が検出した遺構の輪郭に石灰で線を入れており、離れた場所からでも非常にはっきりと見えたこと、ベルトコンベヤーを使って排土を運び、作業効率を上げていたことです。さらには、発掘調査の途中と終盤に、トータルステーションによる測量と航空撮影・測量を行っていたこと、遺構の掘削土も整理の対象として、水で洗いふるいにかけて最大限の資料の収集に努めていたことです。

このほか、私は何度も現地検討会に参加しました。吉野町宮滝遺跡、

桜井市吉備池廃寺、大阪府八尾市弓削寺跡、橿原市石川土城遺跡、五條市五条猫塚古墳、明日香村小山田古墳などの多数の遺跡の発掘現場を見学しました。

以上の発掘調査への参加や発掘現場見学により、層位学や型式学などの伝統的な考古学の方法だけではなく日本考古学の方法を私は理解しました。また、植物考古学、動物考古学、金属考古学などの各種の保存科学技術を応用した考古学も普遍的にみることができました。

② 博物館参観

ある地域の歴史と文化を理解した



写真2 中西遺跡の発掘調査風景

ければ、博物館は最良の場所です。来日後、研究所の差配のもと、私は多くの私の専門分野や考古学と関連する博物館を見学しました。主なものは、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、和泉市久保惣記念美術館、奈良国立博物館、京都国立博物館、天理大学附属天理参考館、白鶴美術館、東京国立博物館、早稲田大学會

津八一記念博物館、九州国立博物館、福岡市博物館、佐賀県立九州陶磁文化館、泉屋博物館、大阪歴史博物館などです。これらの博物館見学を通じて、日本の各地の歴史と文化についての基礎的な知識を得ただけではなく、日本の博物館の展示理念、収蔵管理、研究などの方面での博物館運営が成功するための方策を理解することができました。今後私自身が中国において、関連する事業を推進する時には、非常に参考となり得るものでした。

③史跡（遺跡公園）の見学

中国考古学における発掘調査の進展によって、いくつかの重要な遺跡の遺構展示と活用も喫緊の課題となっています。東大寺、興福寺、唐招提寺、唐古・鍵遺跡、馬見古墳群（馬見丘陵公園）、新沢千塚古墳群、平城宮跡、藤原宮跡、飛鳥宮跡、高

松塚古墳・キトラ古墳（飛鳥歴史公園）、高取城跡、高野山金剛峯寺、近つ飛鳥風土記の丘（近つ飛鳥博物館）、吉野ケ里遺跡、熊本県立装飾古墳館、鴻臚館跡などの遺跡公園の参観を通して、様々な検討を経た上で整備保護された歴史文化遺産の展示と活用事例として、非常に参考となりました。

④日本の古代美術史の学習

日本の装飾古墳・壁画古墳の内容を理解することが今回の私の研修における目的の一つでした。来日前は、この方面の知見はあまり多くありませんでしたが、研修期間中、研究所の差配によって、私は奈良県内の壁画古墳と熊本県内の装飾古墳を実見できました。また、日本考古学と中国語に精通されている菅谷所長による日本の古代墳墓・寺院、歴史的建造物について、美術史的見地からの特別講義が十数回ありました。今回の研修においても重要な収穫となりました。

⑤学会への参加と学術交流

研修期間中、研究所が企画した各種の講座を聴講する以外に、京都府立大学で開催された日本中国考古学会、京都大学生存圏研究所開催のシンポジウム「木の文化と科学」VI木の



写真3 九州国立博物館バックヤードの見学風景



写真4 大阪歴史博物館見学風景



写真5 国際シンポジウム「ユーラシアからのまなざし」講演風景

文化と科学の今、そして未来」、早稲田大学で開催された第一〇回アジア考古学四学会合同講演会に参加しました。これら以外に、中国から橿原考古学研究所に招聘された西北大学文化遺産学院の先生方とともに国際学術シンポジウム「ユーラシアからのまなざし」に参加し、講演も行いました。

（以下、一五二号に続く）

人の動き

〔退職 平成二八年六月三〇日付〕
柳田 明進 資料課主任技師
↓奈良文化財研究所研究員

員

〔退職 平成二九年三月三十一日付〕
木下 亘 附属博物館副館長〔定年〕

須藤 好直 資料課長〔定年〕
井上 主税 企画課主任研究員

西川加奈子 関西大学文学部准教授
↓調査課嘱託職員

天野 歩 附属博物館嘱託職員
↓文化財課技師

松下 裕彦 総務課長
〔退職 平成二九年五月三十一日付〕

岡林 孝作 調査課長
↓文化財保存課課長補佐

光石 鳴巳 調査課指導研究員
↓文化財保存課調整員

坂口 真理 総務課主任主査
↓大淀養護学校校長

岡田 雅彦 調査課主任研究員
↓文化財保存課主査

〔採用 平成二九年四月一日付〕
鈴木 朋美 調査課技師

齊藤 希 調査課技師
河崎 衣美 資料課技師

勝川 若奈 附属博物館学芸課技師
神所 尚暉 調査課嘱託職員

〔転入・所内異動 平成二九年四月一日付〕

豊岡 卓之 企画部長
↓副所長兼附属博物館長

入倉 徳裕 文化財保存課主幹
↓企画部長兼附属博物館副館長

川上 洋一 文化財保存課調整員
↓調査課長

卜部 行弘 資料課係長
↓資料課長

水野 敏典 企画課係長
↓資料課係長

鈴木 裕明 企画課指導研究員
↓企画課係長

藤元 正太 文化財保存課主査
↓調査課主任研究員

高木 清生 調査課主任研究員
↓企画課主任研究員

伊豆 充弘 会計局会計課係長
↓総務課長

〔所内異動 平成二九年三月一日付〕
杉山 拓己 調査課主任研究員
↓企画課主任研究員

〔昇任 平成二九年四月一日付〕
岡見 知紀 主任技師
↓主任研究員

海外交流

派遣…

中国陕西省（西北大学・陕西省考古研究院）へ派遣していた岡見知紀所員は三月一七日に研修を終え、帰国しました。

受入…

一月から当研究所で研修されていた韓国国立羅州文化財研究所の李志映氏は、三月一〇日に帰国されました。

中国陝西省考古研究院の曹龍氏が、二月二八日から三月三〇日まで当研究所で研修されました。

昨年八月から当研究所で研修されていた中国寧夏文物考古研究所の馬曉玲氏は、六月二二日に帰国されました。また同研究所から王宇氏が六月一六日に来所され、一〇ヶ月間の予定で研修を行います。

附属博物館展示案内

速報展

「大和を握る35」

―二〇一六年度発掘速報展―

二〇一六年度に発掘調査された奈良県内の遺跡から約三〇遺跡を選び、出土遺物・調査写真パネルを展示し、最新の発掘調査成果を紹介します。

開催期間…平成二九年七月一五日

（土）～九月三日（日）

講演会…七月二三日、八月五日、八月一九日、九月二日の各土

曜日（午後一時開始）に遺跡発掘調査報告会「土曜講座」を開催します。

「黒塚古墳のすべて」

三角縁神獸鏡三三面の出土をはじめとする天理市黒塚古墳の調査成果は、古墳研究に様々な問題を提起しました。発掘調査から二〇年となる本年、進展した研究成果に基づき、その全貌を紹介します。

開催期間…平成二九年一〇月七日

（土）～一二月二六日（日）